

# 和 顔 愛 語

国 信 玉 三

病は口から入り、禍は口から出るといふ諺とともに、和顔愛語というコトバも、日本では古くから親しまれていますが、その出処は、無量寿經の上巻にあります。

法蔵菩薩が、一切衆生を成仏させるために、「たとえ身を、もろもろの苦毒の中に止むとも、わが行は精進して忍びて遂に悔いじ。」と、一大決意を持って48の誓願を建立します。そして、一方には説法獅子吼す、という勇猛な句とともに、諦聴、諦聴（汝明らかに聴け）という厳しい語が使っていますが、他方では、和顔愛語（顔色を和らげ、角立たぬ言葉を使う）とともに柔軟と言う語が、しばしば出ております。柔軟心とは、高ぶることなく、沈むこともなく、諸法実相を了知して、人生のまことのすがたに随順して逆らうことのない心であります。

一体、人間が動物と異なることの一つは、言葉を持っていることでもあります。

人間は、社会生活を営む生物でありますから、相互の連絡、意思の疎通のために、言葉は重要な役割を持っています。説法は師の側、聴聞は弟子の側、和顔愛語の説法を柔軟な心で聞くことは、師弟関係において、重要な姿であります。師弟合一、すなわち、万法一如の境地で、これが覚（さと）りの世界であります。

仏教では、物という代わりに法とか行という字を使っております。法とは、水が去る意で、水は常に低きに流れますから、法の字は、法則の意味もありますが、行く雲、流る水のように、それぞれ因縁によって常に止まることなく動いていて、変化し、流動している意味から、万物とか諸物とか言わないで、万法とか、諸行とか申しております。物というと、変化しない固定観念に執られる傾向があります。執われず、片よらず、こだわらず、というところに空の思想が生まれ、そこに、自由、平等の世界が開けてきます。その境地に到達するのが和であり、愛であります。

赤んぼが、母親の乳房からお乳を吸っている姿は、権利の主張や、対立の世界ではなく、与えて喜び、頂いて喜んでいる自然法爾の信心歓喜の姿であります。

純真無垢な幼児の教育にたずさわるとは、「職を教育に求めるのではなく、生を教育に求めた。」のであります。こうした心境は、人間だけに得られる幸せな心の世界であります。

人間を感情の動物とか、考える葦とか、頭の動物とか申しますが、仏教では覚者（仏陀）のこゝろを二足尊、または両足尊と申します。

人類の祖先が長く樹上生活を営んだことは、前肢の指が発達して物を把握することができるよ

うになった原因であります、樹上生活に見切りをつけて、地上に降り、後ろの二本足で直立して生活し歩行するようになってから、急に頭部が発達して大きくなりました。

人類の脳には運動中枢と知覚中枢の外にその二倍もある総合中枢といって、記憶、<sup>しりょ</sup>思慮、判断等の精神作用を司る部分があります。動物は四足獣<sup>しそくじゅう</sup>と言って四本の足で身体を支えています、<sup>くび</sup>頭部のある頭部は頸を通して、その前方にぶら下がっていますので、頭部が余り大きくなると、これを支持する負担に堪え難くなります。ところが、人類は、二本の足で直立して頭部を身体（体幹）の上に据えておくようになってから、頭部の発達が許されてきました。<sup>じゅうるい</sup>獣類の耳は頭のテッペンにあります。耳の孔と鼻の孔が水面に出れば、<sup>おぼ</sup>溺れることはありませんから、類人猿を除けば、動物は生まれながらにして水面を泳ぐことが可能であります、人類は、<sup>ぜんとうよう</sup>前頭葉が発達して、眼の上にオデコが出張って、耳は頭部の両側に位し、それがために、お産が苦しくなりましたし、水に溺れるようにもなりました。しかし、動物と異なり、思考力ができて、物の由来を考えたり、<sup>いんが</sup>因果の理法<sup>りほう</sup>が解るようになりました。これが手指の発達と相まって、科学技術が進歩発展して、今日の人類の分化を達成したのであります。

人間の言葉は思想の発達に、思想の発達は脳の増大に、脳の増大は二本の足で直立歩行するようになったことに起因します。だから、二足尊、両足尊ということは、一切の人間は覚者となり得る、すなわち、<sup>じょうぶつ</sup>成仏する可能性がある尊者<sup>そんしや</sup>であるという示唆であります。ところが、かの巨大なマンモスが、その発達し過ぎた牙のために滅亡したと言われるように、人類もまた、科学技術の進歩のため亡びていくのではないかと憂<sup>うれ</sup>えられるようになりました。

元来、共同生活をして助け合っていくべき人間の間に個人主義的欲望が発達し、また、夫婦相和して、永遠の生命を尊重して、その継続発展に努力せねばならないのに、性欲のとりことなつて、眼前の幸福に溺れてきたのではないかと、生命本来の念顔を忘れて欲のために目標を見失ってきたのではないかと考えられます。

前足<sup>もつぱ</sup>が専ら手として使用されるようになった人間は、幼い頃から、お手々つないで協力し、成長するに従って手分けして各自その個性を活かし、その分を守って社会生活を完成すべきであります。そのためには、合掌の生活、すなわち、時空を超えて無限の大自然と一致するつつましい<sup>けいけん</sup>敬虔な宗教感情にまで到達せねばなりません。

和顔愛語と柔軟心とが一体となる幼児教育こそ、今日の人類に課せられた重大使命だと思いません。